

特集

『創業者に聞く』

谷口奈保子さんロングインタビュー

最終回

前回の特集は『暮らしの場所』として、グループホームとぱれっとの家いこつについてお届けしました。最終回となる今回は、国際事業とそしてこのインタビューのまとめをしたいと思います。（事務局長 南山）

●各事業の成り立ちやご苦労されたことなどを伺ってきました。最後にぱれっとの国際交流について教えてください。

ぱれっとは、様々な人たちが集まる場所であるというお話をしましたが、創業時から日本人だけでなく色々な国の人たちが関わっていました。当時私の家にホームステイに来ていた高校生も活動に参加し、この人たちとは今も交流があります。また、福祉について学ぶ機会を求めて海外に勉強に出かけたというお話もしましたが、個人的な訪問だけではなく、実はおかし屋ぱれっとのメンバーや親の会の人たちとも自分たちで積立をして定期的に海外旅行に出かけていたのです。モンゴル、マレーシア、韓国、インドネシア、スリランカなど、外国人と触れ合う機会はとても多かったです。そのきっかけとなったのは、やはり1991年にオープンしたスリランカレストランぱれっとだったのですが、行き来が始まって現地の福祉を知るにつけ、昔の日本と同じように障がいのある人たちは家にこもっていて、学校にもろくに通えていないという状況を知り、ぱれっとで何かできることは無いか、と考えるようになりました。そんな中で現地の人たちから、「日本からの寄付金で施設を建設できたりするのは大変ありがたい。でももっと必要なのは考え方やノウハウを根付かせるための協力です」という話を聞き、障がい者が働くクッキー工場建設のプロジェクトをスタートしたのです。

●10年経って現地に委ねる

1999年「Sri Lanka Palette」を立ち上げました。現地の会社経営者の協力の元、この工場は10年経きましたが、現地でのビジネス経験も無い私たちにとっては、大変な苦労でした。も

ちろん現地政府の支援など無く、運営も日本からの寄付を定期的に補填しないと安定しない状況が続いたので、何とか現地の人たちに委ねられないかと考えるようになりました。そんな中で、大手の製菓会社が工場の設備やスタッフ、障がい者を丸ごと引き受けてくれるという申し出があり、人との出会い、つながりに深く感謝する出来事となりました。

●スリランカの今

今もちろんこの工場は続いていて、頼もしく成長した障がい者たちが生産を続けています。現在直面している課題は実は日本と同じくグループホームのような生活の場で、関係者の高齢化に伴いそのニーズは一段と高まっています。昨年スリランカに久しぶりに出かけてこの話をした際に、始めは暗かった当事者の親の表情が、日本の取り組みの話を聞くにつれて生き活きと変わって、意見も活発に出るようになったのは印象的でした。私たちもグループホーム作りに出来る限り協力したいと考えていますが、日本のぱれっとも人材面など直面する課題が多いと聞いているのでなかなか難しい状況ですね。



上…スリランカぱれっと開所式
下…作業の様子

●今回でこのロングインタビューは最終回となります。最後に今後のばれっと、今後の地域社会にメッセージをいただけますか？

それはとても難しい質問です。というのは、私は2012年に理事長を相馬さんに委ね、その後しばらくは理事として、また国際部門の代表として残っていたものの、いわゆる「現場」からは距離を置いているからです。委ねた以上は、何もわからないのに現場に何か意見を言うのは極力控えたいというのが本音ですが、今の思いをひとことで言うなら「時代が変わったな」ということですね。ある意味では福祉の制度が整って、専門家が増えたように思います。ばれっとの創立時には文字通り何も無く、それゆえに公的機関や専門家とやり合うことも多々ありました。そうやって作り上げてきたばれっとを利用する人たちが増えたのはとても良いことであると思う反面、それを使うだけで終わっているというか、「もっと制度的な使い勝手を良くしていこう」「新たな可能性に挑戦しよう」という声を上げる人が少なくなったように思っています。昔と違って当事者の母親を含め働く人たちが増えたのはとても良いことだと思うのですが、そういう人たちを始めとしてもっと声が上がリ、ばれっとだけではなく社会全体としてそれを形にする器の大きさも無くなっていっているようで不安に思うことがあります。というのも、今の時代はスマートフォンで何でもできるようになって、人と人が直接深く接する機会が本当に減っていますよね。私は何時でも直接会って、直接話してばれっとを作ってきたので、思い込んでいるところもあるとは思いますが、便利なものが増えれば増えるほど、良いこと悪いことの判断や本当は何が問題なのかという、人とのつながりの中での「掘り下げ」が薄れているのではと危惧しているところがあります。対障がい者だけではなく、同僚や関係者、いろいろな人と手を結び、もちろん良いこと悪いこと含めてですが、向き合い、意見を戦わせるというのが面倒に感じる時代になってきているのかなと思うところがあります。反対意見を言

われると否定されたという気持ちになってしまい、それゆえに遠慮しがちになるという声も聞きますが、それは意見を言うほうが相手の立場に立って伝えていないという基本の部分だと思えますし、そこから学ぶことも間違いなくあると思うのです。そういう機会が少なくなってしまうことに懸念があります。AIに頼りがちな流れも含めて、このまま進むとばれっとの本当の姿も薄れてしまうのではないかと危惧しています。

●忘れられない場面

少し話が飛ぶんですが、昔作業所に通っていた障がいのある青年が、どうしても脱いだ自分の服をしまうことができず、何度話してもだめだったので、「次にやったらここでは働けないよ」と言ったことがあるんです。もちろん本心でそう思っていたわけではないですが、その後同じことを繰り返したので、投げられていた服を預かり、他の障がいのある仲間たちに「一緒に考えてほしい」と問いを投げかけたことがあります。現代の福祉制度に沿い、指導や支援という立場に立って見ると、本人と支援者の間での話になるのかも知れませんが、私は皆で考える場面を作りたいかった。相当時間がかかりましたが、あるメンバーが、考えた末に今日は作業着で帰ったらどうかという案を出してくれて、自分事として考えてくれたことに本当に救われたのを覚えています。当時はまだ今のように世の中に支援の技術も専門性も少なく、一つひとつ様々な角度から見て、じっくり聞き、向き合い、人とのコミュニケーションを基本として取り組んでいました。そのプロセスに意味があったと思っています。今は人数も増え、そこまでじっくり向き合う時間もなかなか取れないかも知れませんが。

●人が好き

谷口さんは良く「人が好き」という言葉を使われます。これはどういう風に言い換えられますか？

もちろん気の合う人、合わない人というのはあります。良い人ばかりではないのもその通

りです。でも私はその中でも、人から学んだこと、気づかされることが本当に多かったです。自分の思い込みに気づき、見えていなかったものが見え、そして何より本当に多くの人たちに支えられてきました。それが私の、というより「ぱれっと」の魅力のひとつだと今も思っています。私は肩書にこだわる人では無かったので、現場を人に委ねながら海外を含めて学びに出て、また人と出会うということを繰り返してきました。滞在時、次のぱれっとを担ってもらいたいという想いから、短期ではありましたが相馬さんを施設解体が進んでいたアメリカに呼んだこともあります。そういった学びについては、積極的に後押しもしましたが、今は忙しくなって、なかなかそういう機会も持ちにくいという話は聞いていますね。

●障がいのある人たちを社会に押し出す

今、「意思決定支援」が重要な柱と言われているが、振り返ってみてそこはどうですか？

ひとことで言うとならば「社会に押し出す」という取り組みだったと思います。ただそれはあくまでも「本人が望む形をどう用意できるか」という基本があって、周囲の思い込みや指導に基づくものではないと今も思っています。アメリカで学んだ1990年代後半、現地はまさにその過渡期にあって、施設解体もその中のひとつだったわけですが、当時、日本の特別支援教育や福祉の現場で、どうしても「教える・指導する」になりがちで「あなたはと思う？」という対話が少ない現実を見てきた私にとってはまさに目から鱗だったことを覚えています。制度に従ってただ決まったことをやるのではなく、個々の想いに応える形で、ユニークかつ、クリエイティブな事業を行なえる、そんなぱれっとだったら、関わる人たちも楽しいでしょうね。

●お話を聞いて

インタビューは計3回行なわれました。お話を聞いてみて武井・山元の両編集委員から。

山元：制度も何も無いところから事業を立ち上げてきたというのは、まず単純に考えてす

ごいことと思って伺っていました。おかし屋ぱれっとの販売先についても、今私たちはそのベースがあって運営ができていますが、当然始めは何も無かったわけで、企業との出会いやその広がりの出発点を知ることが出来ました。

武井：次々に事業展開をしていく中で、それでも現状に甘んじないというか、海外を含めて学びの場も求めたというのが、今のぱれっとにつながっているのだなと思うと同時に、振返って私にはまだまだ出来ていないなと感じました。

谷口：何歳になっても、学びは重要だと私も思います。4歳の娘を小児がんで亡くし、それをきっかけに再入学した福祉学科で障がいのある人たちと出会い、そこで「これだ!」と思った・・・すべて出会いと学びの結果です。文献を読む、研修を受ける、それだけではなく直接出向いて話す、見る、確認する。本当に人と話すことが好きでしたね。

武井：私の知っているところでは元「いこっとサポットの会」の方々などは、本当に皆さん仲が良いというイメージがあります。先日の日帰り旅行でも参加していただきました。

谷口：お話したように、「いこっと」の取り組みは自分の中では少し早かったのかもと思うところと、コミュニケーションの取り方や働き方について私が思っていた形とは違ったのかなと振り返っていますが、そこで培われた彼らの仲の良さには一役買ったのではと思います。

●最後に

「社会に押し出す」という意味では、彼ら自身が社会で役割を持つ必要もあります。スリランカにクッキー工場を作る時も、おかし屋ぱれっとのメンバーが現地に出向き、指導的な役割を果たしたという場面がありました。今後も制度の充実に向けて、現状に満足せずに声を上げること、そしてその中だけではなくもっと大きな枠組で、もっと様々な角度から社会を捉える学びとチャレンジが必要だと思います。

～※谷口さん、ありがとうございました～(たまり場ぱれっと武井/おかし屋ぱれっと山元)

聞き手：事務局長 南山